佛教研究　第三卷　第四號

古龜茲國洞窟壁文とシャムブハラ國佛教

寺本婉雅

一、古龜茲國洞窟壁文に就ての解說　二、古龜茲國洞窟壁文の和譯　三、シャムブハラ國旅行記の和譯
四、シャムブハラ國佛教史概要の和譯

一、龜茲國洞窟壁文に就ての解說

西域の龜茲國洞窟內の壁畫の研究に就て、最近グルユンウエーデル氏（Grünwedel）は發掘物の結果を纏め、「古龜茲國」（Altkutscha）と題し、尨大なる函帙二部を發表した。曩きにスタイン氏が于闐國の發掘物の研究を發表して「古于闐」と題したるに傲ひたるものであらう、この外に燉煌の發掘物ありて、中央亞細亞佛教研究に關する史料は年を逐ひて豐富精密を加へて來たのは何よりも愉快なる次第である。

龜茲國洞窟の壁畫はその種類多數に上り、一々に解釋を施してゐるのは非常に有益であるが、今その中にて西藏文を以て古代龜茲國の佛教及びその他の諸教に關する沿革と、龜茲洞窟内の各種の壁畫の緣起と、畫家建築家の來歷を記載せる有益なる壁文が載せられてゐる。この藏文の緣起の外に尙その洞窟と洞外に於ける諸種の建築物等に關する詳細なる見取圖をも載せてゐる。その圖面上の各伽藍や、堂祠、或は諸王の客殿或は摩呢教堂、猶太教、等の殿堂の跡を詳細に註記せるは、當時佛教以外の諸宗教との混合の狀況を悉知する恰好の史料である。今それらの中で、最も肝要と覺ゆる洞窟の壁文を譯し、之に基いて佛教と外道との交渉、洞窟壁畫の作者藝術家の國籍と年代等を一瞥せんと思ふのである。古龜茲の洞窟壁文より撮影したる、洞窟緣起文は西藏文を以て記してあるが、筆者の何人なるかは、全壁文中には記載せられてないからして、之を知るに由ないのを遺憾とする。然かし之に由てその年代と傳道者の國名等を粗ぼ知ることの出來るのは最も愉快を感ぜしめらる、然し壁文の中に出づる隣國の王との交渉等に依て、古龜茲に於ける佛教、その諸教との交渉關係も粗ぼ推知せらるゝから、此壁文は古于闐や、燉煌の發掘物に比して劣らざる重要の史料であると考へらる。

二種の壁文、一は短く、一は長文であるから、前者の和譯を「其一」とし、後者のを「其二」として掲載した。この壁文を譯出するに就て、その中に出づる觀貨羅の佛教、バクトリャの佛教、或

は時輪說（Kālacakra）の起源及發生地、年代等を研究すべき必要を充たさんが爲めに、私は別に新史料として「シャンブハラ國旅行記」と、「シャムブハラ國佛敎史概要」との二篇を添補した。是等の新史料中に出づる佛敎傳播の國名、諸宗敎等に付て精密に研究して發表せんとの志望あれど、編輯期日に迫りたれば、そは他日に期することゝし、今は一應の解說に止めおいて、大要は譯文に依て讀者の研究に俟つことゝする。

壁文の「其一」に於て、メンドレ王、波斯王、アーナンダヴルマ王（觀貨羅）は藝術家シットラダッタや、シリャ國のプリャラトナ等の藝術家に命じて龜茲の諸洞窟內に諸繪畫を描かしめ、そしてメンドラ王と、觀貨羅王とは阿彌陀佛の身體を受得して極樂に往生したと云ふことが記載せられてゐる。慧超が開元十五年（727. A. D.）に龜茲に至つた事情を記して、「此龜茲國足寺、足僧行小乘法喫肉及葱韮也。等漢僧行大乘法旦於安西有兩所漢僧住持、行大乘不食肉也、大雲寺主秀行、善能講說」（洛陽伽藍記）、云々とあれど、龜茲國に佛敎傳入の年代は史料の正確のものないから分り兼ぬるが、第四世紀の中頃に小乘の僧卑摩羅叉（Vimalakṣa）が龜茲に到りて布敎し、羅什に從て十誦律を授かつた（西域記解說）といふことである。玄奘は龜茲にて大品般若經を得て止ること二年間であつた、當時龜茲の首府に五六ケ寺あり、高昌の僧十名も居た程であるから、龜茲の佛敎も盛んであつたことが推知せらる。

壁文に依れば當時メシャ教（猶太教）も既に行はれ、龜茲洞窟内に住してゐるのである。メンドラ王はメシャ教徒を放逐して、メシャ教徒の洞窟に佛の繪畫を描かしめた、又その時代に覩貨羅の王子が裸體派（Nirgranṭha, 離繫子）をして時輪說（kālacakra）を說かしめたとある。されば時輪說は覩貨羅國より輸入せられたものであることが明瞭となつた。そして此時輪說が印度に輸入せられしは 950. A. D. であつて（by Waddell's The Buddhism of Tibet）西藏國へは 110. A. D. に輸入された。ゼツンローザンツェヂニマ（Rje bTsun Blo-bzain Chos-Kyi Ni-Ma）の著「シャムブハラ國佛教派通方法誌」（別譯參照）に據れば「班禪（パンツエン）チルバ（Tsi-Lu-pa）と、摩迦羅波陀（Dus-Shabs-pa che-pa, Mahā hālapāda）等が、シャムブハラ國（バクトリャ國）より時輪說を弘通した、吉祥賢覺（Çrī bhadrabodhi）と、セラブチャク（Çes-Rab Grags）等の譯家二十五人が漸次西藏に來つて時輪說を傳布したとあり。Candradas は「時輪說は第一佛（Adi-Buddha, Thog-Maḥi Sans-Rgyas）の名に依て輸入せられた、時輪說は西紀十一世紀に Çambhala 國に起つたのである、シャムブハラ國の都市は中央亞細亞の R. Oas（縛芻河）の附近にあり、西藏にて阿提沙（Atisa, 彼の來藏は 1038. A. D）と、歷史家ブトンリンボッヒ（Bu-Ston Rin-Po-che, 1288. A. D.生）は此宗派に屬す」（Tibetan and Fnglish Dictionary, by Candradas）と言つてゐる。印度にては第一佛の代りに濕波（Siva）或は伽涅舍（Gaṇeśa）を以てその宗派の神とする。壁文によれば時輪說はプレトレ王が熱心に信じて敎

徒を養成せしも、メンドラ王の爲めに彼等の敎徒は拂はれた。プレトレ王は西藏有史以前の初王ニャーチツァンボ（gNaḥ-Khri bTsan -Po）に裸體外道派の書を送つたと記してゐる。この藏王ニャチツァンボは西紀一世紀半頃（？）の出世であらう、王の後天人七代、地人六代を經て尙十五代目にトトリニャンツァン王（Tho-Tho-Ri gNan-bTsan）なるもの出でた、王は印度世親菩薩と同時代の人なりといふことは既に確められてゐるから、王は西曆四百年頃の出世であらう。王の代に寶器莊嚴經（漢譯大方廣寶篋經）、百拜懺悔經、十善經等が天空より降下したと尊崇せられた、寶器莊嚴經は阿彌陀佛のことを說いてあるから、西藏には有史以前より阿彌陀佛の思想は傳播せられてゐたのであらう。かくて六世紀半に開國の英主スロンツァンガンポ王が出でたときには、既に王を阿彌陀佛の化身なりと尊稱する程に、阿彌陀佛の思想が西藏の民間に普及せられてゐたことが分る。又「プレトレ王が裸體外道の書をニャーチツァンポ王に送呈せし時、龍樹の僞書たる「阿鼻地獄鬘」を藏王に送りしかば、藏王は怒つて火中に投燒せしめた」（Alt-kutscha, p. 19）と壁文に記してゐるから、龍樹の出世年代は迦膩迦王出世年代に就て、定まるのである。ヰンセントスミス氏曰「張塞は西紀一二五年より同一一五年の間に月氏に使せし頃は、月氏は縛芻河（濕水）の河北ソグディニヤ（Sogdinia, 安息）に住した。西紀七三年より同一〇二年の間に班超は軍を西邊に進め、西紀七三年に于闐を征服した。迦膩色迦王は西紀一二〇年、又は一二五年に卽位し、閣膏珍二世を繼承し、乃

至迦王は于闐を征服せし結果に因りて印度佛教は支那に輸入せられた（Early History of India, by Smith. p. 217—227）. と云つてゐる。されば迦王の西紀一二〇—一二五年間の卽位年代は、軈て龍樹在世の年代となる。されば西藏有史以前王ニャチツアンボは龍樹及び、迦膩色迦王と同時代となり、龍樹の佛教が西藏には龍樹の在世か又は滅後時代より輸入せられたものと推定せらるであらう從てプレトレ王の年代も粗ぼ推知せらるべきである。

西藏王ニャーチ、ニャンツアン或はハトトリ、ニャンツアシ王（400. A. D.）の代にシリヤ人（Syrien）の藝術家マハープルレ（Mahāpurle）は覩貨羅の王宮に來つて、龜茲國王メンドラ、ハグ（Mendra-hanu）の信書を奉して使者として來り、遂に覩貨羅に停住したと壁文に記してゐる。

以上の記事に依て、覩貨羅と龜茲と西藏とは三國交通して各文化を促進せしめたことの一端を窺知せらるであらう。

壁文の「其二」に就て—壁文「其二」に記載せる如く、波斯人の摩呢（Mani, Mo-Ni）なるものの唱道した摩呢教は龜茲國に傳播せられ、遂に佛教と混合し、摩呢を以て佛の化身なりとする本地垂迹說を立て、觀音の化現者として拜するに至つた、そして摩呢教徒は佛教と共同してメシヤ教（猶太教）の諸派を放逐した、是は西藏トトリニャンツアン王時代なりと云ふから、世親菩薩の出世年代卽西曆四百年の間の出來事である。此藏王の代に、埃及人（ミゼル ,Mizer, Ägpten）の藝術家

アンテニ（Anteni, Antonius）は、觀貨羅王の文殊の化現者（觀貨羅王）を描いて來藏した。彼は西藏に於て觀貨羅王の信書と昔より天降の聖典と稱せられつゝ來つたところの寶器莊嚴經等を拜見して、經卷、佛畫等多數の贈品を持たしめたる使者を西藏に派遣した。そして藏王の佛敎に入門したことを見て彼等の使者は觀貨羅國へ歸つたのである。

觀貨羅とシャムブハラ國との關係—壁文に龜茲國を稱して「觀貨羅のシャムブハラ」（Togar-Gyi Çambhala）と記入してゐる。このシャムブハラ（Çambhala）とは別譯「シャムブハラ國の佛敎史概要」に示さるゝが如く、釋迦族のシャムブハラ族の名より取つたもので、幸福、平和を生すもの（bDe-ḥByun ḥDsin-pa）の意味であると記してゐる。此の藏譯の bDe-ḥByuṅ とは自在天、威力、勢力を意味する梵語 Iṣvara,（dBaṅ-Phyug.）又はギリシャ（Girica）の名である。龜茲國が佛敎弘通せられて、平和安樂發生の國土なるを意味する「シャムブハラ」といふ理想鄉の名目を以て、その國を形容したのである。龜茲國は東洋史上にては未だ觀貨羅の配下となつたことはないと言ふことであるが、よし此兩國は政治的には何の關係もなかつたとするも、龜茲國の佛敎並にその美術等が觀貨羅國より傳來せられ、觀貨羅國の影響を受くること非常に大なるものあつたから、壁文の筆者は龜茲を呼稱するに「觀貨羅のシャムブハラ」と題記したものではなからうか。若し然らずとせば龜茲は觀貨羅の政治的關係を受けたものとも考へらる、是は尙考究すべき事項である。

シャムブハラ國　位置―叙上の如く、「シャムブハラ」の藏譯 dBaṅ-Phyug は Iṣvara（自在、威力、勢力）又はギリシャ（Girigia）を意味する國名なりとすれば、是れ或は希臘の國名 Grege ではあるまいか。元來希臘の國名は何を意味するかは不明であつて、唯民族の名としてゐるといふことである。今、シャムブハラの位地は覩貨羅國中にあるか或は、縛芻河邊であることは疑いない。そしてシャムブハラ國の首府はカラーバ城（Kalāpa）なりとは「シャムブハラ佛教史概要」中に明示してゐる。然らばカラーバ城とは、西域記に曰へる曷邏胡國（ka-Rāghu）であらう。「曷羅胡國覩貨邏國故地也、北臨縛芻河周二百餘里、國大都城周十餘里、土宜風俗大同活國（Kunduz）從書健國東踰峻嶺、越洞谷、歷敷川城、行三百餘里、至訖栗瑟摩國」此曷羅胡國の地勢は別譯の「入シャムブハラ國旅行記」中に記せる地理と稍々符合するやうに考へらる。この旅行記にはシャムブハラ國の北東地方にはシータ河ありといふ、シータ河とは西域記の徙多河（Sita）であつて、佉沙（Kaṣgar）の東南にある大河である。さればシャムブハラ國は覩貨羅の故地であつて、縛芻河邊に位してゐる地方であることが推定せらる。シャムブハラ國のカラーバ城には如來滅後の時代に華嚴經、無量光莊嚴經、解深密敎、般若經等の大乘經は廣く弘通せられてゐたと「入シャムブハラ國」に示してゐる。是に由てシャムブハラ國が大乘佛敎國であつたことが分明になり、又大乘諸聖典成立地の闡示を與へらると思はる、この事に就て尙充分の研究を要すべきかなれど今は解顯に止めて、餘日更に稿を改

め、博雅の君子に指教を仰ぐ次第である。

二、古龜茲國洞窟壁文の和譯

（其一）ミルリ（Mir-Li）の記錄

（一）「諸の佛教者の爲めに――メンドラ王（Mendre）或は波斯王（Po-lo-si, Perser）或はアーナンダヴルマ（Ānandavarma）なる覩貨羅王（To-Gar-Gyi-Rgyal-Po）は多數の洞窟内に藝術家ミトラ、ダッタ（Mitradatta）と、裸體外道（Nirgrantha gCer-Bu-Ba; 離繫子）より來りしナラヴハナダッタ（Naravahanadatta）と、ルマカマ地（Rumakama; Syria）より來れるプリヤ、ラトナ（Priyaratna）と、彼等藝術家の諸弟子とに命じて諸の繪畫を描かしめた。メンドラ王と覩貨羅王（Rgya-ser-Gyi Rgyal-Po, 黄髮王）は阿彌陀佛（Omitobho; 梵語 Amitābha が支那音に訛せるもの）の身體を受得して極樂（Sukhāvati. bDe-Ba-Can）に往生した。

大黄髮王（覩貨羅王）の子はミルリ城（Mir-li）に行きて發願して、裸體派の人々をして一切の時輪說（klāacakra, Dus-Kyi ḥKhor-Lo）を說き、諸洞窟にその佛畫を描かしめた。

（二）此に於ける諸メシヤ教徒（Mi-Çi-Ya-Pa, Messia 猶太教）の淨窟にメンドラ王は諸佛の繪畫を描かしめた。ムルリミン地（Mur-Li-Min）の王は派遣せられて、ジンリ地（Lin-Li）より來りし藝術

家アモグハヂンドゥ（Amoghavindu）或はリピダッタ（Lippidatta）或はアガタ、ダーマー（Agathadāmā）をして釋迦牟尼佛の諸行蹟を描寫せしめ、プレトリ王（Prethre, Plitḥri?）に依て養成せられたる一切時輪派の教徒を放逐した。

（三）此にはムルレ王（Mur-Le）と、プレトレ王（Prethre, Plitḥri?）とに屬する時輪派の諸洞窟六十五ヶ所を發掘して破壞した。

（四）此にはアナン、カヴルドハナ王（Aanangavardhana）は諸佛洞に佛諸行蹟を描かしめ、印度人の藝術家ウールドヴ、バーフ（Ūrdhvabāhu）或はネミンドラ（Nemindhra）はリピジュニャナ（Lipijñā）洞窟（ṣsha）の聖殿より來つてヌラーディーナ殿（Nurādīna）に黃金の天蓋を献供した。

（五）此にはメンドラ王（Mendrc）は龜茲國（Ku-Tsaḥi-Yul）の城内にある大元金剛（Mahākala, Nag-Po Chen-Po,大元師）の神像が夢中に建立せられたる塔中に現はれて、メシャ教徒（Mi-Çi-Ya, Messia 猶太教）のルマカマ（Ru-Ma-Ka-Ma）神殿に火を放ちて燒きたるを觀たるに、メシャ教徒は、カランタカ、ニヴーサ（kalantakanivāsa）に洞窟を建立した。そして諸比丘と比丘尼の爲めに優留毘維迦葉（Ūruvilva-kiśyapa, Ūruvilvaḥi-Hod-Sruṅ）を恭敬する淨舍と諸洞を建立して佛國に往生した。

プレトレ王（Prethre）は戰爭に行きし際、ムルレピンディ（Murlephiṇdi）窟と、プリトレピンディ（Plitḥrepiṇdi）窟とに時輪の大乘派を建立した、プレトレ王は婆羅門の名を有する龜茲國の諸都

督を罰し、ミルリ地に行き、ムルレピンディ窟と、「プリトレピンディ」窟と、王とに麝香（Muṣati）を盛れる籠を献げた。

如來の聖殿と淨舍と祕密の諸洞を建立し、阿鼻地獄（Avici）を恐怖し、睡眠中に懊惱せり。ムルレピンディ窟にオンロン（On-klon. 猛惡神）の神像を安置したから夢中に佛を見奉り、極樂（Sukhāvati, bDe-Ba-can）に住生したのである。

プリトレピンディ窟の八人の焰口瑜伽母（caṇḍālā, gTum-Mo）は火を發して燒失したから、王は（彼等を）放逐し、ムルレピンディ窟の焰口瑜伽母メンドレザーデ（Mendrezāde）或は他の瑜伽母等を鐵棚内に投じた。（その時）メンドラ王は多枳呢（mKhaḥ-ḥGro-Ma, Ḍakiṇī, 空行母）の寶塔を諸裸體派に献じた。

プレトレ王（Prethre Rgyal-Po）は西藏のニャーチ、ツァンポ（gNaḥ-khri-Chan-Po, 原文 Chan-Po は bTsan-Po の誤字?）に裸體外道（Nirgranṭha Jñātiputra, 離繫子の親戚子）の書翰を送つた。

爰に於て「阿鼻地獄の鬘」（Avicihi-ḥPhreṅ-Ba）と名くる龍樹（Klu-Sgrub）の僞書（Yi-Ge-Rdsun）を送つたから、西藏王は恐つて火中に投棄した。」（Alt-Kutscha. by Grünwedel. P. 19.）

（其　二）

アイドゥクト（Idukut, Idukuta）と名くる土耳古（Türka）大王の宮殿の頂上にシャンブハラ（Sa-

mbhala, 幸福を生する自在の意）と名くる地球形（Sa-Rten）の鏡あり。摩呢（Māṇi; Mo-Ni）と名くる化身の聖觀自在に敬禮す。

是の如く我は聞けり。一時に於て、金剛薩埵（Rdo-Rje Sems-dPaḥ）は天、阿修羅、羅叉（Rākṣasa, Srin-Po）乾闥婆（Gandhava, Dri-Za）龍、多迦（Dāka, dPaḥ-Po）多枳尼（Dākinī, dPaḥ-Mo）と共に吐魯蕃（Thurpan）のリミン地（Mi-Min）に於ける地球（形）城の前に化身を現せり。此に於てメンドレハグ（Men-Dre-Ha-Ñu）と云へるプレトリ人（Phri-Thri）或は吐貨羅人、或は諸部落の人々は會合せり。（その時）彼等一切の人々に告げて曰く、He-he-he, he-he-he-Ru-ka; He-he-he he-he-Ram-bha, Hrin Phut と。

彼等はリミン地に於て磚甎城を造つたから、一切菩薩の爲めに、聖觀自在の化現者は、淨殿、神殿、呪殿（Tantra, Rgyud-khaṅ）に於て、諸の多迦、多枳尼の眷屬と俱に集合して誦讀した。是に由て諸人をして世間を解脫せしめん爲めに、ゼツンザンボ、クンツェン（Bhadanta Bhadra Sarvajñā, Rje-bTsun bZaṅ-Po Kun-nKhyen）は知らぬ間に星城（Skar-Rdsoṅ）を變造し、金剛鬘の諸精舍を建立した。ルマカマ（Ru-Ma-Ka-Ma, Syrien）地のオルモルンリン（Ḥol-Mo Luṅ-Rin）窟に集りて波斯（Po-Lo-Si）の賢者摩呢（Mo-Ni）と名くる化現者の爲めに放逐の制規を作り、諸多枳尼母の時輪說がミゼル（Mi-Zer, Ägypten, 埃及）のグルザー（Gru-Ça, Gruza）の諸人の爲めに散亂燒失

せられたるを龜茲又はサトトゥン（Sa-Stun）地よりそれらの時輪に關する經典を結集して大寶塔を建立した。

勝者佛陀の化現者はメシヤ（Migiya, Messias）の諸派を精舍より放逐し、ボクル（Bokur, Bugur）に於ける精舍を敬供したのである。

メンドラハグ（Mendra hanu）と西藏パートトリ、ニャンツァン王（Lha Tho-Tho-Ri gNan-bTsan）或はニャチーニャンツァン王（gNaḥ-khi gNan-bTsan）の時代に於て、黃髮大王（Rgya-Ser, 覩貨羅王）は神の神（Lhaḥi-Lha）なる文殊菩薩の化身である。ルマカマ（Rumakama, Syrien, シリヤ人）の藝術家マハープルレ（Mahāpurle）は黃髮王の宮殿にまでメンドラハグ王の信書を持して使節として來り、黃髮國に停住することゝなつた。

ミゼル（Mizer, Ägpten, 埃及人）の藝術家（gSo-mKhan）アンテニ（Anteni, Antonius）は黃髮國（覩貨羅）の文殊の化現者（吐貨羅王のこと）を描きて、王統ニヤチー王（Rgyal-ḥPhrein gNaḥ-Khri, 西藏王）に使した。而して覩貨羅王の信書と、寶篋莊嚴經（Ratnakaraṇḍaka, Za-Ma-Tug bKod-Pa, 漢譯大方廣寶篋經）等の天空より降下せりと（傳へらる）ものを觀て、經卷、鈴、金剛杵、鬘、佛畫、金剛薩埵（Vajrasattva, Rdo-Rje Sems-dPaḥ）の繪像、救度佛母の栴檀像、摩訶迦羅像（Mahākāra, Nag-Po Chen-Po）、摩呢（Mo-Ni）經典等を持たしめた使者をニャーチー王に送り。時輪鬘

(Kālacakra-Māla, Dus-Kyi ḥKhor-Loḥi ḥPhreṅ-Pa) と名くる註釋書 (Puṇika-ādarśa, Pu-Ni-Ka-Ma) と化現の金剛多枳呢天母 (Vajraḍākinī, Rdo-Rje ᵐKhaḥ-ḥGro-Ma) の黄金像を王に送つた、王は是れが爲めに發願せしかば(諸使は)親貨羅國へ歸り去つた。かくて王は一切の場所に摩呢(六字眞言)と時輪と日輪車の淨殿、神殿、星殿等の諸堂、及び日輪車、日輪少女等の諸輪を安置し、諸寶塔を建立した。

メントラハグ王 (Mendra-haṅu) と、ピトハグ王 (Pito-haṅu) とは一切衆生の利益を行つた、善良なる摩呢 (Ma-Niḥi bZaṅ-Po) 教徒は虹霓曼荼羅を日車像の傍に安置し、吐魯蕃城の Vipulanigh-aṇtu (洞窟) より Poṇ-de-Ruṅ-Riṅ (洞) まで隱遁者の諸繪像を描き、ポンデ、ルンリン(洞)の北方 Ū-Māla (U-ḥPhreṅ) 河の面前に諸の隱遁者を描ける大神殿を建立し、諸の摩呢 (Mo-Ni) 教徒に依て多くの經典奉物を藏せられたのである。

觀音を恭敬する Mūlatuṅga 殿と名くる秘密洞に諸典の天啓 (gTer) と日車像の繪畫を描き。爰には諸の法王と多枳呢母 (Ḍākinī) とは日車像の面前に住して、精神鳥は水上を飛び廻りつゝゐる

庫車 (Kuca) の王と、ジルヴ、ルンリン地 (Dsir-Pa Luṅ-Riṅ) の藝術家ピルセナ (Pirosenas, Phi-Lu Se-Na) と、ルムカム地 (Lum-kam) のアント (An-To) と、その補助者藝術家プリヤラトナ (Priyaratna) とは、プリトリ (Phri-Thri, 親貨羅) の多枳呢母ミルリプ (Mir-Li-Pu) と名くる

ものゝ生んだところの土魯蕃の大王メンドラハグ（Mendrahanu）の繪像と、諸の摩呢多枳呢母（Moni-Dākinī）が、スペンタ、アルマティ（Spenta-Armati）と Amurdatamo と、Bru-Zantima と Brukaṣa の海邊に拜跪して Bahādur-Guṣaṭeva と、Peṇde-Lu-ki-Nu klu-Mo と、Bahādur Guṣṭepa（Vistāpa）と、Pen-ḍe-Lu-Ki-Nu-Klu-Mo と、Ū-Mālā（Ū-ḥPhreṅ）と、I-mālā（I-ḥPhreṅ）と、Ka-mālā（Ka-ḥPhreṅ）との諸の坦特羅（Rgyud, Tantra）を作つた。

プレントレ王（Pren-Thre）の代に於て、ウ河の流に諸多枳呢女は沐浴してあつたとき、多くの檀柳形の眞珠鬘（Ḥom-Buḥi Mu-Tig ḥPhren-Ba）を得て Li-Kri, Zi-Kri, Mi-Kri, Ni-Kri を誦しつゝ天空に向つて投げつけたとき、多くの裸體派の者現はれ世間に多く雨を降した。王は彼ウ河の水邊に行きて多くの檀柳眞珠と食物とを受け、諸（方）に於ける諸有情を饒益した。

Li-Kri 或は Padmavati, Zi-kri. 或は Makari, Mi-kri, 或は mitima（Mi-ḍhū）, Ni-kri. 或は Subhagā 或は Liṅga 大力の傍に行きて、彼は呪文を誦した。（呪文を略す）。

プレトレ王（Pre-Thre）は土魯蕃城内に淨殿、神殿を建立し、磚甄城の中央に大曼荼羅を築きたる諸の摩呢敎徒に向ひて刑法を造り、多くの時輪派敎徒を放逐し、多くの佛敎徒を火中に投じ、一切佛像を破壞し、諸群生の利益を行はなかつたに由て、摩呢敎徒は土耳古王（Turuka）の前に去つた。而して諸偈を以て土耳古王に告げて言く。プレトレ王は吐魯蕃（Thur-Pan）城に住して此方（摩

呢教）を攪亂し、一切諸人を追拂ひて諸群生の饒益を行はざるなりと。

（土耳古王は）摩呢教徒の爲めに Mi-Zer Gru-Sha の曼荼羅と、Pur-Le-Ma と Tur-Le-Ma との諸の多枳呢母を增伽し、吐魯蕃に於けるメシヤ教徒（Messias. Mi-ǫi-Ya; ゼジュイト派）と、Bagar 地（Ba-kra）に於けるネストリヤン教徒（Ni-Çtūra）と、kirike 地に於ける諸人を守護せず、回紇（Yo-Gur）の諸王に夜魔（神神）の曼荼羅を與へ、諸のメシヤ教徒に斧刑を與へ、ネストリヤン教徒に桀刑を與へ kerike 地の總てのものには刑法を制定した。

かくて諸土耳古の大王は摩呢教の使節に命じて曰く、善哉々々。行き（行ふ）に適してゐると。摩呢教徒と、嬉金剛（Rdo-Rje Herka）の教徒等は破壞しに行きしや否。吐魯蕃に於けるメシヤ教徒、及びネストリヤン教徒（Neǫtuli）の總てのものを放逐して散布せざるべからずと思惟した。かくて總ての回紇教徒の諸部落の人々に鋒、斧、箭、弓、鈔、投石、水攻、膝石、Ol-Mo Lui-Rin の矢と、六叉、車、皮、六華、幢、仙人の泡沒刑、諸鋒を與へて土魯蕃人を退かしめた、

ブレトレ王は戰爭に勝利を得て放逐せしが、Mūlatuṅga 地に於ける諸佛教徒の眷屬の曼荼羅を觀しところ、摩呢教徒の放逐せられし化身者を見て、忿怒して、諸摩呢教徒に向て此地を放逐するの法律を制定した。

諸の佛教徒は（爰に於て）耻辱を濺いだ、そして Mūlatuṅga 地方の時輪教徒と、善良なる摩呢

教徒の衆團に向つて法律を制定して火にて燒き拂ふた、尙諸佛教徒の長老と一切の守門者は選拔に依て行はしめた。

金剛多枳呢天（Rdo-Rje mKhah-hGro-Ma）の諸淨殿に菁蕪、黃金を供へて金剛乘（Rdo-Rje Theg-pa）を滅せしめた。かくて諸の大乘派は王の前に來集するようになつたから、諸の回紇教徒の總てのものは三寶を敬禮するに至つたのである。（終）（Alt-kutscha. by Grun wedel. P. 175）

三、シャムブハラ國旅行記

本書はネパール國人アモグハンクシヤ（Amoghlukuça, Don-Yod Leags-kyu）の著はせし「入カラーバ城」（Kalapivatāra, Ka-Lā-Par-bJug-pa 丹珠爾部 Po. CXXXIII. P. A. 349-P. A. 363）をターラ、ナートハ（Tāranātha）が藏譯せしものに據てその概要を抄譯す。カラーバ城とはシャムブハラ國の首府名であつて、西域記の「曷邏胡國（Ka-Raghu）覩貨邏國故地、北臨縛芻河、周二百餘里、國大都城周十四里、土宜風俗同活國（Kunduz）」とあるもの卽ち是である。本書の著者アモグハンクシヤの說であるけれど土地遙遠で何人も容易に行きがたいから自然と記事の大部分が神話的になつてゐる、然かしその中に覩貨羅地方や支那領（當時は印度）の徙多河などの地勢に關して比較的詳細なる記事が載せてあるから、信を置くに足ると思はる。此書の外に尙後藏札什倫布（チャシルンポ）寺の第三世ローザンヴルダンイーシ（Ulo-bZan dPal-Ldan Ye ces 1738 A. D.-1780. A. D.）が自から旅行した「シャムブハラ國路程記」一卷が存してゐる、それと對照したならば稍正確なるバクトリヤ地方の古代に於ける佛教の狀況、地理風俗等も知り得る好史料であるが、今原稿編纂期に追られてゐるから、その遑のないのを遺憾とする。他日更に稿を起すことゝする。

（前略）――「カイラシャ山（Kai-La-ga ネパール國より眺めて）の方面に「カラーバ城」（Ka-Lā-Pa）城あり、常に平和にして富裕である。そこには諸王子あり、最勝尊王にして、常に法を有ちて國動搖なく、種族と非種族とに差別を附せず、材と力とを有し、人の外出するや十由旬那の路を行くに二十三頭の馬を具し、五十路を一日にて達す（一由旬那は四千尋にて約一哩に當る）。大河や淺湖もない。因陀羅神、手金剛等は常に國を守護し、能く行はゝ論部は諸方面に擴がり、般若經（Ḉes-Rab Phal-Rol-Phyin）入提伽經（Laṅ-kaḥi Groṅ-Du-ḥJug）と、解深密經（dGoṅs-pa Ñes-Par Ston-Pa）原文 ston-pa は甘珠爾部には ḥGel-pa とあり）と、大集經（ḥDus-Pa Chen-Poḥi Tshogs）と三寶雲經（dKon-mChog Sriṅ）と、無量光世界（Ḥod-dPag Med-Paḥi ḥJig-Rten）と、現歡明莊嚴（mÑon- dGaḥ bKod-Pa gSal-Ba）と、毘盧舍那國（Rnam-Snaṅ-mDsad-Paḥi Shiṅ-Khams）と、嚴飾莊嚴經（bRgyan-Gyi bKod-Pa）と、華嚴經（Phal-Po-Che-Yi mDo）等の諸經あり、（Kalapāvatāra, 丹珠爾部 CXXXIII. P. B. 35o－35r）。

爾時聖金剛羅刹母（Rdo-Rje Sriṅ-Mo Ral-Pa gCig-Mo）曰、嗚呼王子等よ、未來の五百歳の末に於て如來教法に隨入せんと欲するものは、外道の密語を求むるものあらば、勝解信を以てその意義を明かにし、彼等を退治して正路に就かしめ、自他共に利する因を以てカラーバ城に行くべし、斯る方法を正實に教へんことを望むと。（P. B. 35r）

此州の西方にはラトナサーガル（Ratnasāgara, 寶海）あり。外國貿易商人と倶に乘馬にて北方へ行けば、シゴドハラ州（Glii Si-godhara）と寶庫と名くる州に至るであらう。此洲の四方には回回教徒あり、かしこには行くこと能はず、東方に於ける近き城までは六ヶ月を要すといふ、そこには如來牟尼の羅覩婆がある。

此州の青河（Chn-Klui Sion-Po）と、云へる湖とその流れは東西に方向を同じくしてゐる。ルガマ城（Ru-Ga-Ma,）と、ラーサリ（Lāsali）と、カダキーラ（Kaṭakīla）と、マドゥフヴーンドハ（Madhuvāndha）等の城は、此方より北方まで六ヶ月行くを要す。これらの彼方に火河あり、サトゥル（Sa-tru）といふ。カカーリ（ka-kā-Ri）と名くる雪山あり、それを越えねばならぬ。この國の人民は正直にして素朴なれば旅行は困難も危險もない。山中にはトゥジナヤ（Tu-ji-Na-Ya）と名くる甘味の良藥草と、ティーラカ（Tī-la-ka）といふ藥で非常に苦味を有する牛乳の如きものあり總ての花は日出の如く紅にして、その葉は鋸齒の如く、先尖は鋭利にして、南面せる巖石間より生ず、是れ卽ちドゥジナ花なり。深谷の懸崖にかゝりて、水牛の乳の如き白色の花はティーラカ花である（P. B.3 53.）

それより北方を見れば二十一日間にして達するであらう、路上には草木なく又灌木も水もない。そこを過ぎて彼處には森林あり、蛇狗等棲み、曠野に存する寺廟までは十二日間にて行くを得べし

その彼方には山王カンドハラ（Gandhara）あり、高さ二十由旬那、彼山中は種々の藥草に充ちてゐる。（p. B. 354）

それより北方面に當つて大雪山あり、この雪山より東、西には河水流れ、地中より湧出する八十千の大泉と混合して海の如く現出するも、その原因は不明であつて、白色を呈してゐる、是卽ちシーター河である、（西域記曰、從此南行五百餘里濟徙多河、踰大沙嶺至斫句迦國，Chakūka さればシーター河、徙多河は今の葉爾羌河か）。その河の水風の長さ一千三由旬にして、東と西とに於ける湖は毒を有し、廣さ一由旬である（一由旬は四千尋卽ち十五町位）。水極めて冷寒にして、鳥魚、鰐等の動物もない、但し地獄の有情を除く。此河の此岸には銅色と名くる山あり、洞穴一千あり、ラシャカ樹（Raçaka）と、クルマカ（Ku-Lu-Ma-Ka）と、タマル（Tamaru）と、デヴダトゥ（Devabatu）と、ヒマラヤ杉（Çig-Pa）等の樹木茂生してゐる。（P. A. 355）

徙多河（シーター）の水風は極めて冷寒なるが故に、地上の雪風に觸る總ての物は露滴にて傷害せられ、冬月の中旬には尙氷の張ることなきも、冬月の初旬には堅氷張り詰むるから、旅行者は何の畏もなくして河の彼岸に達し得るであらう。此河はブハダッタ（Bhadatta）の支流と稱せらる、そしてこの國の半途の中程まで行き得るであらう。

南と北とは大國九十六と、九十六（國）の住民あれど、東西は北方よりも廣大なり。この河の彼岸

にはケタカ樹（Ketaka）とヴィラ（Vaila）と、カフヒタ（Kavhita）と、バトゥシャ（Patuça）と、ヴダラ（Vadara）と、カピタ（Kapita）と、アルジュナ（Arjuna）と、タラ（tala）等の森林あり。そこは一ケ月にして耕作を終り、草、穀物、花葉等は食し得らる程能く熟する。（P. A. 357）

かくして北方に直行すること一日にして、ケタラ山（Ke-tā-Ra）に至るであらう。山中に金銀鑛山あり、その四方には蓮華、青蓮華湖ありて鴦とツェトラヴカ（cetravaka）とガランタ（Garanta）等の水鳥ありて美しく妙音にて啼いてゐる。

それより北方に行くこと遠からざるところに大メナコ山（Menako）あり、山中にツァンバカ花（Tsam-Pa-Ka,）西藏の佛畫にある水蓮或は芍藥花に似たる花と、カルコル花（Karkol）と、マラカ花（Marika）ケトゥカ花（Ketuka）キムヴカ（Kiuvaka）ナーガ、プシュパ（Nāga-Puçpa）等の諸花あつて森林を圍繞してゐる。

その北方に於ける大河は東より西に流れ、波浪高くして渡り難い、河名をサトヴ、ロタナ（Satva-Lotana）と稱する、諸種の魚族あり、河邊には虎、獅子、狗、牛、猿、鶏鵡、大鴉等がゐる（P. B. 357）

此路の東と西との五百由旬の彼方には、村落、城廓等あれども、それらの道路より行かんとせば（路困難の故に）百年を經過すとも、尙（シャムブハラ國の首府）カラーバ城に到ることは出來な

い。

徒多河の北邊の一帶の地方は雪山が多い、この河を全然渡りたる北方には、閻浮提の北方の諸城ありて、國、村落、城廓、無城の都市ありて、平和に住してゐる。彼の所住者の名に由てシャムブハラ國（Çambhala）と名けらる所以である。この國には回教徒なく、平和を語つて詐僞はない。

此河とカイラシャ山（Kailaça）に至る間の國々は、その數多くして、ニャ國（Na, 尼攘城 Niña.?）までは二十由旬である。プリンド國（Pulindo）までは二十由旬であり、ブハダスヤナ國（Bhadasyana）までは百由旬であり、チナ國（Tsi-Na）までは千由旬であつて、（西藏）衞州の方面に當る。ダルド國（Dard）までは百由旬、クル國（Kuru）までは百由旬、ブハドリカ國（Bhadrika）までは五十由旬である。是等の彼方にあるガンドハラ國（Gandhara,「日藏經護塔品」曰、以于闐牛角峯山、瞿摩沙羅乾陀「Gomasāla-Gamdha」牟尼大支捉「municaitya」處付囑於我」ガンドハラ國とは于闐の異名である）まで二十由旬、カーシャ國（Kā-ça, 佉沙國）までは二十由旬、ブハドラ國（Bhadra）までは二百由旬、マハーチナ國（Mahā-cina 大支那國）までは千由旬にして、（西藏）衞州（dBus）の方面に當る。ブリギカ（Brigika）までは二百由旬あり、是等の諸國の彼方にマヒシャカ國（Mahiçaka）ありて二百由旬あり、マヒラコ國（Mahilako）までは千由旬にして西藏衞州の方面である。（P, A. 358）

カラーバ城までは考を以て旅行すべし、大國とバイラコカラ國（Vayilā-Kokhara 露領バイカル湖邊か）の諸國と、北より北へ進み得るも、その路程は甚だ愉快である。數千人といへども、呪力を持せば、六ヶ月と二十二日間よりは多くを要せずして行き得るのである。（P. A. 359）

群生を救濟せんが爲めにアマグハーンクシャ（Amoghānkuça, Don-Yod Lcags-kyn）は之を說いたのである。（P. A. 362）

「入具吉祥カラーバ城と名くる大乘方法の解說」は完結す。

（西藏の）喀木地（Rgyal-khams）の人、ターラ、ナートハ（Tāranātha）はネパール國（Bal-Po）の書より譯せり、クリシュナ、ブハダ（Kṛṣṇafhaṭṭa,-Kṛṣa）は之を記して刊行せり。（P. B. 363.）（終）

四、シャムバラ國佛敎史概要

シャムバラ國とは西域縛芻河 R. oxus. の河畔に國を建てし觀貫羅國の故地、縛喝（バルク）の異名である。爰にゼツンローザンツヱヂニマ（Rje-bTsun Blo-bZan Chos-Kyi Ñi-Ma）が西藏曆六十年一週說の第十六回の辛酉歲二月八日に著せる「一切敎法原理說明方法妙釋明鏡」（Grub-mTha̱ Thams-Cad-Kyi Khuns Dań ḥDod-Tshul Ston-Pa Legs-bṢad Cel-gyi Me-Loṅ P. B. 200 - P. B. 203）中の「シャムバラ國佛敎流通方法誌（Ćambhalaḥi Yul-Du bStan-Pa Dar-Baḥi Tshul）に據て、その大要を抄譯す。

此シャムブハラ國は世尊在世の時代より時輪說（Kāracakla）は存在して今日に及べり、未來も同樣に流行するであらう。

シャムブハラ（Çambhala）なる名稱は釋迦族のシャムブハラと名くるものより取つて名づけたものである。シャムブハラとは「安樂、平安發生を持つ」（bDe-ḥByun ḥDsin-Pa）と云ふ意味である。「安樂發生」とは力、威勢、富、自在主（īsvara, dBaṅ-Phyug）の意である。そして dBaṅ-Phyug とは梵語ギリシャ（Giriçia; 今の希臘國？）である。此國は一名「シャムバラ、オ」（Çambhala-Ḥo）とも謂はる。

シャムブハラ國の地勢、地勢は球狀で周圍は雪山に圍まれ、內は八葉蓮華の狀態をなし、各葉の間より河は流る。その中央の葯狀形の處に大雪山あり。各蓮葉形の間には多數の國土あり。その中央の雪山に依て四州に區域せられ、その中央にはカラーバ城（Kalāpa; 西域記の曷邏胡國）あり。南方にマラヤ森林（Malaya; 現今の Maryhitam）あり。東方に近湖（Upasara, Ñe-mTsho; 現今の Equius 湖？）あり、西方に白蓮湖（Pad-dKar mTsho 現今の Aral 湖？）あり。爰には諸のクリカ族（Lulika, Rigs-Ldan）の諸王の住する大宮殿あり。

クリカ族の王統、クリカ族の王統は二十五代出でたりと云ふ。時輪根本坦特羅（Kāracakra-mūla-Tantra, Dus-ḥKhor Rtsa-Rgyud）に據れば、第一に月王（Zla-Ba）第二、自在主（Indra-deva, Lha-dBaṅ）第三、有光輝（gZi-bRjid-can）第四、施月（Zla-Bas-Byin）第五に大自在（Mahaiṣvara, dBaṅ-Phyug-Che）第六、ビシュヴルーバ（Viçvarūpa, Sna-Tshogs gZugs）第七、具自在天（Indradeva）と

名くる法王七代出で、その後二十五代の諸王出でたり。

シャムブハラ國の佛教の起源、世尊は壬午歳（?-Chu-Rta）現に佛教徒が後の歳日（Phyi-Lo Ni-Ma）と名くる壬卯歳（chu-Lug）の黑月の日に靈鷲峯に於て、般若經を說き給ひしと同時に、吉祥積米寺（Çridhânya-kataka, dPal-Ldan ḥBrus-Spuns; Orissa 市の Kataka の故地）に於て法界十二自在眞義（dBan-Phyug bDen-Don）と、天上十六種星曼荼羅解を作りて附屬し給ひしかば、シャムブハラ國の賢月王（Zla-Ba bZan-Po）は之を尊重した。

カラーバ城の化現者たる法王九十六人及び無數のものに、金剛界の大曼荼羅を附與して、時輪根本坦特羅を說いた。法王賢月は之を卷帙に書いてシャムブハラ國へ請來し、時輪の學舍を建て、坦特羅一萬二千の註釋を造つた。

爾後六百年にクリカ族の最初に文殊師利稀爾締（Manjugrī-Kīrti, ḥTam-dPal Gags-pa）なるもの出でゝ百年間根本坦特羅を說いた。時に仙人日車（Ni-Mahi Çin-Rta）等をして之に熟達せしめ爲めに集めし勝坦特羅（Rgyud-Rgyal）を說いて、一族（Rigs-gCig, kulik）或は、一明（Rigs-Ldan, Vidika?）を造りしかばクリカ族（Rigs-Ldan）或は一明（一智）と云ふ名稱を得した。その後クリカ族白蓮（Rigs-Ldan Padma dKar-Po）は卽位し、百年間に根本坦特羅を集め、坦特羅を說いて無垢光論（Dri-Med ḥOd-kyi eStan-bCos）と名くる註解を造つた。

時輪說の起源、或時代に班禪(パンツエン)チルバ (Paṇ-chen Tsi-Lu-Pa) と、摩訶迦羅波陀 (Mahà-kalapada, Dus-Shabs-pa Che-Pa) 等がシャムブハラ國より聖者國(印度)へ時輪論を弘通せり (950. A. D.)。吉祥賢覺 (gribhadrabodhi) と、チョ地人譯家セラブチャク (hBro-Lo, Çes-Rab Grags) 等の譯家二十五人が漸次に西藏に來りて西藏國に時輪說の曼荼羅を說き弘めた。(1110. A. D.)

現在のシャムブハラ國のクリカ族の王統十九代目は强力を以て支配せしかば栴陀王 (canda, Drus-Po) と稱せられ、庚申歲 (Lcags-Sprel) に彼は卽位し、享年七十五歲なり。

クリカ族十世デャムソ、ナムデャル王(Rgya-mTsho Rnam-Rgyal)は卽位して日燈と云はれ、甲申歲 (giu-Sprel) よりメカー海 (Me-mKhaḥi Rgya-mTsho) の要地を覆し、マカー國 (Ma-khaḥi-Yul) に於てアンホ (Ainho) と、アホグハ (Ahogha) と、タバグダン (Phag-Ldan) と、チーバワンボ (Byi-Ba LBaṅ-Po) と、白衣者 (Gos-dKar-Can) と、マンフマティ (Maṅ humati) を摧伏し、回々敎の敎師と共に住せした。

回敎徒の撲滅、彼等の中にて第七世ガルダン (mNar-Ldan)、又名はチャン、チーロレー (Sbran-Rtsiḥi Blo-Gros) は、外道の行ふ卦爻法を造り、回々敎を宣布した。その時諸外道は回々敎に入り內道の諸伽藍を破壞し、回敎の住留する年代を計算して、今後千百餘年間住すべしと云つた。今此庚申歲 (Lcags-Sprel) より約五百三十七年を經過せば卽ち六十年一週說の第二の丙卯歲 (Me-Lug)

に、クリカ族のチャクラバチ王（Cakravati, ḥKhor-Lo-Can）は、シャムブハラ國に卽位して法を說いた、彼は五十歲を經過せば牟尼の敎法、經典は大半滅し（外道の）呪文に付て諍論するの時代となるべしと云へり。丙申歲（Me-Sprel）より印度の西方ティリ國（ṭiri, 今の印度信度河の上流 Tiri 地にして、33. N; 71. E. にありて Peshawar の南 kohat の西南に位す）に非天の化身にして回回敎の小王アンガ、サマージャ（Aṅgasamāja, dPuṅ-Gi Tshogs, 臂聚）等出で來り、徒多河（gitā, 今の佉沙「kashgar」の東南に徒多河あり、西域記參照）の南方國と、西藏の衞州等の國々を共に併合して、閻浮提の一半の領土を占領し、シャムブハラ國まで兵を進めた。當時の狀況を記せる時輪根本坦特羅（Dus-ḥKhor Rtsa-Rgyud）に據れば、「その時クリカ族の栴陀王（Canda）出でゝ回々敎の終末なり」と謂へる如く、クリカ族第二十五代の文殊の化現者たる栴陀チャクラバチ王は諸回々敎を撲滅した。その方法は諸回敎徒を征伏する爲めに、馬九萬、象四十萬、車五十萬と眼界の達する程の無數の兵士を以てシャムブハラ國より閻浮提に來り、印度の徒多河（Chu-Bo gi-tā; 西域記の佉沙 Kashgar の東南徒多河 Sita なり。原文に印度とあれども今の支那領なり）の邊に於て回々敎徒と戰爭し、回々敎王マドゥフマティ（Madhu-mati, Sbrin-Rtsihi Blo-Glos）なるものは栴陀チャクラバティ王の爲めに擊退され、回敎の大將大月（Mahā-candra, Zla-Ba Chen-Po）の子と、インドラヤナートハ（Indraya-nātha, dBaṅ Po mGon-Po）の二人は次第にクリカ族の大將ハヌマンダ（Hanu-

manṭha) と、栴陀チャリラ、ハチ王との爲めに打たれて敗戰した。其時諸天はクリカ族の味方となりて援助せしかば、回教軍は殘らず敗北し、領土の全部はクリカ族の有に歸し、大乘法は盛に弘通せられ、人民は前よりは一層勇氣と平和に生活した。

回教と外道とは同じからざるが故に、シャムブハラ國に於ては回教は住せざるに至りしも、外道は以前よりシャムブハラ國に住してゐた。外道は印度の外道と同樣の風規である。現今支那に存する回々教の類である。復諸方より回教族が漸次增加し來り、未來に於てディリ國 (tiḷ, 現今の信度河の上流、Peshawar の南 Kohat の西南に位する Tiri 地なり) に回教徒の大軍起りて全土を一支配下に捲席し、閻浮提の一半を支配するに至るべしとは師匹の言に聞いた。

西藏佛教とシャムブハラ國との關係、 班禪バルダンイーシ (Paṇ-chen dPal-Ldan Ye-ges) の說に、今の時代には、シャムブハラ國に於ても時輪說のみは滅盡せず、經呪の一切の說は宣布せられてありと言つた (班禪バルダンイーシは一名 Blo-bZaṅ dPal-Ldan ye-ges とも稱す、1738. A. D.－1780 A. D. の出、後藏扎什倫布寺の大喇嘛にして、シャムブハラ路程記を著はす)。又達賴二世 (ゲンドゥンヂャムソ dGe-ḥDun Rgya-mTsho. 1475. A. D.－1543. A. D.) の諸論說にも吉祥多枳呢 (ḡila-Dakini, dPaḥ-Po mKhaḥ-ḥGro-Ma) は神通を以てシャムブハラ國へ行き、彼處に於て傳道に從事してゐると言てゐる。

クリカ族のチャンダ、チャクラ、ヴティ王が回教徒を撲滅してより佛教は弘通せられし時代には、昔聖龍樹（Klu-Sgrub, Nāgarjuna）の遺骨、頭髮、像を各地に分配してありしが、次第に減少した。

檀陀チャクラ、ヴティ王は班禪初代（dGe-ḥDun Gruh-Pa, 1391. A. D－1475 A. D.）の佛教徒にあつて、文珠金剛の化身であると謂はれた、彼は宗喀巴（Tshoṅ-Kha-Pa）卽ちローザンツェヂチャクバ（Sumatidharma-kīrti, Blo-bZaṅ Chos-Kyi Grags-Pad, 喇嘛教改革者黃教開祖、大明成十三年生）の面前の地を莊嚴して、未來に於ける反對者たる非天回教軍を摧破する爲めに法輪を轉せんことを祈願した。

クリカ族の大將ハヌマンタ（Hanumantha）は王權をして善慧賢劫の海（Sumatikarpa-Bhadra-aSmudra）ならしめよと言つて諸祕密を願ひ、未來の回教軍を摧伏せん爲めに、金剛鋒を持し十二人の主として化現し、閻浮提の地に安穩を施さんと謂はれた。大將チャンダは吾人の指導者にしてTūāna Çāsanasya-dīpa in grī-bhadra なりと班禪（バンツェン）シュリ、マーナ、ジュニャーナ（Çrī-māna jñāna）の著「祕密教令教示傳具善教妙飾」に詳說してゐる。